

学校図書館図書標準についての平成 29 年度からの市独自の考え方

H29. 4 石狩市教育委員会

(学校図書館図書標準とは)

公立の義務教育諸学校において、学校図書館の図書の整備を図る際の目標として、文部科学省が設定するもの。児童生徒数ではなく、学級数に応じて冊数は算定される。

1. 現状と課題

学校図書館図書標準（以下「図書標準」）の標準冊数の達成を目指し、毎年図書費を措置してきたが、達成校の割合は低い（H27 年度末：小学校 46.2%、中学校 25.0%）。

課題として、もともと蔵書が少ないことや、古い本の更新の必要性から蔵書不足の改善が進みづらい状況に加え、図書標準における「特別支援学級の数」の扱いがあると考ええる。

2. 特別支援学級の数と、標準冊数への影響

標準冊数は、学級数に応じて算出しているため、特別支援が必要な児童生徒が 1 人入学し、1 学級増えると、この 1 学級増に対し目標冊数が 1 学級分増加する。

【例】

○小規模小学校（全 5 学級 20 人、うち 2 学級 2 名が特別支援）の場合

全 5 学級（20 人） : 標準冊数 4,040 冊

通常 3 学級（18 人） : 標準冊数 3,000 冊

特別支援 2 学級（2 人）に対し増加する冊数：1,040 冊（※520 冊／学級）

○中規模小学校（全 16 学級 440 人、うち 4 学級（20 名）が特別支援）の場合

全 16 学級（440 人） : 標準冊数 9,560 冊

通常 12 学級（420 人） : 標準冊数 7,960 冊

特別支援 4 学級（20 人）に対し増加する冊数：1,600 冊（※400 冊／学級）

また学級数も通常学級に比べて年度により増減しやすく、これに伴って各年度の目標冊数が変動するなど、目標達成や蔵書管理に大きく影響することから、平成 29 年度からは次のように考えることとする。

3. H29 以降の考え方

特別支援学級は、支援の必要な全児童生徒数 35 人までを 1 学級（法令で定める小学校の通常学級の第一学年の上限）とみなし、学級数を算定した冊数を目標と定め、達成を目指す

これにより目標冊数が一定化して蔵書管理がしやすくなり、計画的な蔵書冊数の増加及び更新が進むものとする。

【3. の考えによる算定例】

○小規模小学校（全 5 学級 20 人、うち 2 学級 2 名が特別支援）の場合

全 4 学級（20 人）：標準冊数 3,520 冊

通常学級 3 学級（18 人）：標準冊数 3,000 冊

特別支援学級 1 学級（2 人）に対し増加する冊数：520 冊

○中規模小学校（全 16 学級 440 人、うち 4 学級（20 名）が特別支援）の場合

全 13 学級（440 人）：標準冊数 8,360 冊

通常学級 12 学級（420 人）：標準冊数 7,960 冊

特別支援学級 1 学級（20 人）に対し増加する冊数：400 冊

4. 北海道（文部科学省）からの蔵書調査への回答

各校の蔵書の実数を市民図書館がとりまとめて報告（これまでどおり）。

5. 毎年の蔵書管理（目標冊数の確認）

5 月 1 日時点の学級数に基づき、次の内容を市民図書館から 5 月以降に各校に報告。

（例）

学校名	昨年度の状況							今年度について			
	蔵書冊数	学級数		図書標準冊数		達成率		学級数		図書標準冊数	
		市の考え方	実際の学級数 ※文科省基準	市の考え方	実際の学級数	市の考え方	実際の学級数	市の考え方	実際の学級数	市の考え方 ※目標冊数	実際の学級数
〇〇小学校	8,000	13	15	8,360	9,160	95.7%	87.3%	13	16	8,360	9,560